

長谷宗悦

不変な日常などない

2020年

私のスタジオは、富士山麓、青木ヶ原樹海のそばにあります。  
両側に木々がそそり立つ10kmほどの横断道は、私のお気に入りの道です。

春から夏は深緑に、秋は紅葉に、そして冬はまるで白無垢の厚い壁に挟まれた回廊空間のようになります。通るたびに、そこには何かしら新しい発見があります。

昨年暮れ、その道の脇で巨大な倒木を見つけました。  
それは「不変な日常」など存在しないこと、そしてそれを見つめる私自身のあり様を、あらためて客観視させる姿でもありました。他者を通して我を省みる、ということなのではないでしょうか。あるいは、死とは他者が眺めるほかないものなのかもしれません。

今年は早春からの新型コロナウイルスの蔓延に加え、異常気象による記録的な豪雨が続き、多くの不都合や被害が生じました。倒木に見た日常の喪失は、現実のものとなり、私たちは意識の変革を迫られています。

美術には、新しい捉え方によってあらゆるものを想像し、表現しうる無限の可能性や希望があると同時に、Negative capability——どうしようもない事態を受け容れ、それに耐える力——を培い、高める作用があると私は考えています。

以前のように人との関わり合いが容易ではない状況のなかで、直接美術と向き合う機会も限られていますが、それぞれの場所、それぞれの環境のなかで立ち上がるものを、静かに受け取ってもらえたらと思います。